中国遼・金代の建築における補間鋪作の形式

THE VARIATION OF INTERIOR BRACKET SETS OF LIAO & JIN ARCHITECTURE

温 静*

Jing WEN

Bracket sets were important parts of Chinese wooden architecture. After the *Song* Dynasty, there was no difference between the appearances of bracket sets. However, before the *Song* Dynasty there were obvious differences not only between pillar-top, bracket sets and interior bracket sets, but also among interior bracket sets depending on their position, especially in *Liao* and *Jin* architectures. By researching the development of bracket sets structures, various interior bracket sets of *Liao* and *Jin* architectures could be explained.

Keywords: *Liao and Jin Dynasty, Wooden architecture, Interior bracket sets, Design philosophy, Yingzao Fashi*

遼・金代, 木造建築, 補間鋪作, 意匠, 營造法式

1. はじめに

1-1. 研究対象

「補間鋪作」とは柱と柱の間に位置する斗拱であり、柱の直上に用いる斗拱を表す「柱頭鋪作」と対になる言葉である。「鋪作」は積み重ねていく構造を示すため、臺股や束形ものを除外すれば、手先が出ない通肘木形の中備でも「鋪作」と言える。本稿では柱上の斗拱を「柱頭鋪作」と、臺股と束を除いた中備をすべて「補間鋪作」と呼ぶ。これ以外にも、中国建築の用語をいくつかを用いる^{注1)}。

東アジアの木造建築において斗拱は立面を構成する重要な要素としてさまざまな工夫がなされ、各時代の特徴が顕著に表れる部分でもある。13世紀に日本に登場した詰組をもつ禪宗様建築もそうだが、中国の元代以降(13世紀以降)の建築では、一棟の建物の中すべての斗拱が同じ形式をもつことは一般的である。しかし、中国の宋代とそれ以前(12世紀まで)の建築を考察すると、バリエーションの多い斗拱を用いる例が多い。特に遼代(916~1125年)と金代(1115~1234年)の遺構では、一棟の建築の中に、補間鋪作と柱頭鋪作の形式が異なり、補間鋪作自身のバリエーションも多いものがたくさん存在する。本稿は主に遼・金代の遺構に注目し、補間鋪作とその下の頭貫・台輪も含め研究対象にする。

1-2. 既往研究

補間鋪作について日中両国の学者たちは以下の研究を行った。

1) 飯田須賀斯氏は『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』^{注2)}で様々な補間鋪作の形式を斗拱間の手法として解説し、遼代建築の補間鋪作に対して、束あるいは臺股上の斗拱が発達、最終的に上部の斗拱のみが残存するに至ったと述べている。その形式が生じた一面の理由として遼の建築に通肘木の使用が多いためと指摘している。

2) 田中淡氏は「日本中世新様式建築における構造の改革」^{注3)}で、

唐代から元代まで数多くの遺構を紹介した上で、補間鋪作の発展について論じている。田中氏は補間鋪作の初期形態が柱頭鋪作を簡略化したもので、構造の要求に応じて発生したと指摘している。また補間鋪作の完成形態は詰組で、11世紀末には『營造法式』のような詰組の完成した手法に到達したとも指摘している。一方で田中氏は遼代の補間鋪作を発展中途段階と解釈している。台輪の有無に注目し、小さな大斗や臺股を用いるなどの点に遼代補間鋪作の特徴を抽出したが、その発展中途段階と初期形態または完成形態の関連性について詳しく述べていない。また、田中氏の論文では遼代建築を継承した金代建築のバリエーション豊かな補間鋪作が考察されていない、中国建築史の中に遼・金代建築の全体における位置づけを再考察する必要があると考えられる。

3) 関口欣也氏は『江南禅院の源流、高麗の発展』^{注4)}で日本・高麗・中国の詰組系建築の比較研究を行い、唐代から明代まで45棟の遺構を考察し、柱頭鋪作と共に補間鋪作の手先数・昂の数と形式、計心造または偷心造などの情報を集め、そして特に各柱間に配置される補間鋪作の数について述べている。補間鋪作の発展に対して、仏光寺東大殿を柱頭鋪作より手先数の少ない補間鋪作をもつ例、義興奉国寺大殿を柱頭と同じ手先数の補間鋪作を持つ例としてあげている。また、奉国寺大殿の斗拱から『營造法式』の重栱計心造斗拱に至るまでの発展過程を詳しく論じているが、仏光寺東大殿から奉国寺大殿までの斗拱の発展について触れていない。

4) 蕭默氏^{注5)}は敦煌石窟の研究を通して、敦煌壁画に描かれている北朝から西夏までの建築を考察し、それぞれの時代に出現した鋪作の形式を分類した。補間鋪作と柱頭鋪作の差異にも注目し、唐代中後期に柱頭鋪作と一致する外観をもつ補間鋪作が出現したと指摘している。

* 東京大学大学院工学系研究科 博士課程・修士(工学)

Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, The Univ. of Tokyo, M. Eng.

5) 傅熹年氏・郭黛姮氏と潘谷西氏・何建中氏^{注9)}による唐・五代の建築と宋代『营造法式』の補間鋪作をそれぞれ比較した研究がある。それによると、唐・五代の建築における補間鋪作は柱頭鋪作より手先数が少ないこと、また『营造法式』の補間鋪作は柱頭鋪作と同じ外観を持つことが明らかにされているが、その間の発展過程は解明されていない。

以上の既往研究では、石窟や壁画の研究に基づき、北朝・唐・五代(10世紀以前)の斗拱の初期形態に関する研究がされてきた。また、『营造法式』の同じ外観の補間鋪作と柱頭鋪作を用いることが重視されているが、それに対して遼・金代の建築は単に唐・五代の建築を受け継いだものと考えられている。そのため、唐代から宋・金代までの間に、重要な斗拱の発展過程を示した遼・金代建築の斗拱に関する独立した研究が必要と考えられる。

1-3. 研究目的

以上を踏まえ、本稿の目的を以下のように設定する。まず、補間鋪作が発生してから成熟するまでの発展過程を明らかにする。また、バリエーションが最も豊かな遼・金代建築の斗拱に注目し、特に既往研究では発展形と考えられている遼代の補間鋪作について詳しく考察し、その多様な形式を類型化する。その補間鋪作の類型化に基づき、遼・金代建築における中国建築史の中での位置付けを再考察する。補間鋪作を類型化するために、唐代から金代までの出跳する補間鋪作を用いる全ての木造遺構を対象に取り上げ、柱頭・補間鋪作に関連する情報をまとめて表1を作成する。

関口欣也氏の先行研究では、唐代から明代までの中国建築をまとめた表が挙げられている^{注7)}。この表は鋪作の形式に関して、柱頭と補間鋪作それぞれの手先・尾垂木の情報、または手先上の単拱造あるいは重拱造の要素が取り上げられている。

また、野村俊一氏が執筆した「構成要素の調査」『鏝阿寺本堂調査報告書』では、筆者も情報を提供した表が掲載されている^{注8)}。この表は唐代から元代までの一重木造建築を対象にし、鋪作の形式に関して、柱頭・補間鋪作の手先・尾垂木、または台輪の情報がまとめられている。

以上の両表を踏まえ、本論では重層建築や近年に取り壊された建物も対象に含め、鋪作の類型化を行った(表1)。一棟の建物のなかで複数の類型が現れる場合、類型を分けて表示した。また、一部の斗拱に対して「手先」だけでは表現できない要素が現れるため、「手先」以外に『营造法式』でも記載されている「鋪作数」という項目も取り入れた。「鋪作数」について、梁思成氏は『营造法式注釈』で鋪作の二つの定義を述べている^{注9)}。それによると、一組の斗拱の全体を鋪作と呼ぶ。そして一組の斗拱の中に、一層あるいは一跳の肘木または尾垂木とその上の斗を合わせて「一鋪作」とも呼ぶ。また、大斗も一鋪作として計算されるべきである。その他に表1では建物規模を表示する場合、梁間の間数より正確に建築規模を示す「〇架椽」^{注10)}で表示する。

2. 出跳した補間鋪作の登場

以下、補間鋪作の出現から出跳するまでの発展過程を考察する。中国に現存する最も古い木造建築は唐代782年に再建された南禅寺大殿であり、それ以前の建築様式は石窟や壁画に描かれている姿によって知ることが出来る。『中国古代建築史』第二巻^{注11)}では、石

窟や壁画の建築資料を参考に、土木混合構造から木構造までを対象に、出跳しない初期形態の斗拱をまとめて述べている。これを参考に、木構造の建築における補間鋪作は出跳に到達するまで四つの発展段階に分けられる(図1)。

①柱上に乗せた横材に一系列の人字形割束または平三斗を配して桁を支持する。柱上と柱間の区別はなかった。

②遅くとも5世紀の北朝時代に、柱上に平三斗、柱間に人字形割束を交互に配置する形式が出現した。このような柱上と柱間の装置をはっきり区別する形式は柱貫構造の成立に応じて登場し、建築における土木混合構造から木の構造への発展に従った変化と考えられている。「鋪作」は前述した梁思成氏の研究による積み重ねている構造である。その定義によると、柱間の頭貫と桁の間に置かれる人字形割束は補間の「鋪作」としてまだ成立していないと考えられる。

③唐代初期に肘木を持出し出跳する柱頭鋪作の普及に従い、壁付通肘木が出現し始めた。それは柱頭鋪作の出跳によって、斗拱を安定させるために桁行方向の繋がりも果たした。それら柱間の壁付通肘木の間に配された束や人字形割束は、補間鋪作の最初の形態に到達した。唐代中期に壁付通肘木を連続的に積み重ねる形式も現れた。それは後に北方地方建築の特徴として遼・北宋・金代まで伝わった。

④壁付通肘木の出現に従い、桁行方向の繋がり強化された後、補間鋪作に対して壁の直上だけではなく、軒先も支持できるような構造上の機能が求められた結果、出跳する補間鋪作が登場した。

図1 唐代までの補間鋪作

3. 出跳した補間鋪作の発展

唐代中期に登場した出跳する補間鋪作が柱頭鋪作と同じ外観になるまで、それほど時間は要しなかった。五代遺構の山西省の大雲院弥陀殿(940年)と福建省の華林寺大殿(964年)とも、すでに柱頭鋪作と同じ外観をもつ補間鋪作を用いている。ただし、後の遼代建築に柱頭鋪作より小さな古式の補間鋪作をもつ実例が多く見られる。そのため遼代の補間鋪作は発展中途段階として理解されている。

以下、遼代までの遺構に見られる出跳する補間鋪作の初期形態を二段階、合計四類型に分けて考察する。

最初の出跳した補間鋪作は一層目の通肘木に乗り、柱頭鋪作より小さいもので、現存遺構の中に羅漢枋(中間桁)を支持するもの(類型Ⅰ)と椽檐枋(軒桁)を支持するもの(類型Ⅱ)の二種類の形式が見られる。後に補間鋪作は頭貫に乗せられ、柱頭鋪作とほとんど

同様な構造形式になったが、これを柱頭鋪作と異なる外観を表すもの（類型Ⅲ）と詰組（類型Ⅳ）に分けることができる。

3-1. 類型Ⅰ

類型Ⅰは通肘木に乗り、羅漢枋を支持する補間鋪作である。このタイプの補間鋪作を用いる遺構は、仏光寺東大殿（857年）・鎮国寺万仏殿（963年）・独楽寺観音閣2階屋根（984年）・仏宮寺釈迦塔2階屋根（1056年）がある。これらの遺構は尾垂木二本を用いる四手先の柱頭鋪作と、尾垂木なしの二手先の補間鋪作を一对で用いている。前述した蕭黙氏の敦煌壁画に関する研究によると、このような形式は唐代中期にすでに登場したという。晩唐の五台山仏光寺東大殿（図2）と五代の平遥鎮国寺万仏殿（図3）はその典型的な実例である。その中でも、鎮国寺万仏殿の補間鋪作に関して、従来の既往研究の解説では注目されていない以下二つの特徴がある^{注12)}。

①仏光寺東大殿の補間鋪作の一手目は通肘木から出跳し、すべての荷重は通肘木にかかっている。一方で鎮国寺万仏殿の場合、通肘木の下に小斗を設け、小斗下の束（壁面の中に納められている）を通して補間鋪作の荷重を貫まで伝達している。

②仏光寺東大殿の場合、外側の羅漢枋と内側の平基枋は同じ高さだが、鎮国寺万仏殿の平基枋は羅漢枋より一層高い。そのため、補間鋪作の内外とも同じく二手先だが、外側は一層目の通肘木から、内側は二層目の通肘木から出跳している。即ち補間鋪作の一手目は外側のみの肘木となる。

大斗も一鋪として計算されるため、すなわち仏光寺東大殿は補間鋪作の下に大斗がないため四鋪作となるが、鎮国寺万仏殿の場合、内側は同じく四鋪作で、外側は大斗を含めた五鋪作となる。

図2 仏光寺東大殿の柱頭鋪作（左）と補間鋪作（右）

図3 鎮国寺万仏殿の柱頭鋪作（左）と補間鋪作（右）

これによって、鎮国寺万仏殿の補間鋪作は仏光寺東大殿のものから以下のように発展したことが分かる。

①鎮国寺万仏殿はより合理的な構造となっている。通肘木の下に束を用いることによって補間鋪作の荷重を貫に伝達し、通肘木の変形を防止することができる。

②鎮国寺万仏殿に意匠的な工夫が見られる。補間鋪作の外側のみ

の一手目肘木は構造の役割が全くなく、立面意匠のために用いられていると考えられる。また、鎮国寺万仏殿は小規模の方三間仏殿だが、殿内空間をほぼ全部占める群像を奉っているため、殿内空間を狭く感じさせないように様々な工夫をしたと考えられる。天井を張らず徹上露明造を採用し、また平基枋とともに補間鋪作を一層上げている。補間鋪作の外側も内側に合わせて二層目の通肘木から出跳するのは構造的な合理性をもつが、外側のみの肘木を用いて二手先の上に令栱を乗せるようにした。なお、斗栱の立面にみる令栱の意義については、のちほど検討したい。

3-2. 類型Ⅱ

類型Ⅱは通肘木に乗り、檼枋を支持する補間鋪作である。このタイプの補間鋪作はほとんど遼代遺構に見られる。その実例は独楽寺山門（遼984年）・崇明寺中殿（宋991年）開善寺大殿（遼1030年）・下華嚴寺薄伽教藏殿（遼1038年）・仏宮寺釈迦塔1階屋根・仏宮寺釈迦塔裳階脇間（遼1056年）・閻院寺文殊殿（遼1114年頃）がある。それらの補間鋪作は一層目の通肘木から出跳しているが、一番上の手先に令栱を乗せず、華栱で直接檼枋を受けている。その中でも、二手先の独楽寺山門（図4）と四手先の仏宮寺釈迦塔1階屋根の補間鋪作（図5）がその代表的な例である。

図4 独楽寺山門の柱頭鋪作（左）と補間鋪作（右）

図5 仏宮寺釈迦塔1階屋根の柱頭鋪作（左）と補間鋪作（右）

図6 崇明寺中殿の柱頭鋪作（左）と補間鋪作（右）

さらに、遺構の中で特筆すべき例としては、蕭黙氏が『敦煌建築研究』でも挙げた、山西省高平市の崇明寺中殿（北宋991年）がある。補間鋪作は一層目の通肘木から出跳し、一番上の手先に令栱も乗せ、檼枋を支持している。常識を超えた長い肘木を用いており、その肘木に尾垂木の彫刻を施し、三手先のように見せている。また

補間鋪作の下に大斗がないため四鋪作となる(図6)。鋪作数は仏光寺大殿と同じだが、檼檐枋まで支えようと試みた例と考えられる。

3-3. 類型Ⅲ

類型Ⅲは頭貫に乗せられ、柱頭鋪作と異なる外観をもつ補間鋪作である。この類型は遼・金代の遺構で最も多く見られる。これらの遺構は柱頭鋪作と同じ鋪作数の補間鋪作を用いるが、外観に差異が現れる。その中でも二つの発展段階があったと考えられる。

柱頭鋪作と同じ鋪作数の補間鋪作を用いるほとんどの遺構は、最終的に手先方向と壁付方向とも一層目から出跳するが、奉国寺大殿の補間鋪作の場合、壁付の一層目は肘木ではなく、雲形肘木である(図7)。それは補間鋪作が通肘木に乗るものから頭貫に乗るものへ変化する中間の形態とも考えられる。

図7 補間鋪作の下装置・台輪の変遷

ここで注目すべきは、台輪の登場と補間鋪作の下装置の変遷である。通肘木から出跳した補間鋪作が頭貫の上に乗るものへ変化するとともに、補間鋪作を支持する部材に対しても安定性が求められた。台輪を設けることによって、頭貫に直接乗せるより台輪との接触面積を広げ、補間鋪作を安定させたと推測できる。

台輪は古く五代の大雲院弥陀殿で見られ、その後重層建築の平座にも用いられていた。ただし、広東省に位置する梅庵大殿(北宋996年)は早くも台輪を用いたが、時代が下がった寧波の保国寺大殿(北宋1013年)、福建省の元妙観三清殿(北宋1015年)、河南省の少林寺初祖庵(北宋1125年)はいずれも台輪を用いなかった。そのため、台輪は北方地方を中心に発達した特徴とも考えられる。遺構を考察した結果、遼の地域または遼に隣接する地域に台輪をもつ建築が集中的に多い。一方で、遼代建築の中にも台輪が定着するまで少し時間を要したものがあつた。初期の独楽寺山門では、補間鋪作の下に小さな大斗を用い、大斗の下に束を設けて直接に頭貫に乗せ、台輪を用いなかった。下華嚴寺薄伽教藏殿のように台輪が束の下に現れた後、遼代建築の要素として定着した。

また、補間鋪作の下装置に注目すれば、独楽寺山門や下華嚴寺薄伽教藏殿のような大斗の下に束を用いる古式から、閻院寺文殊殿の束の下に臺股を用いる例まで、補間の鋪作数は柱頭より少なかった。後の奉国寺大殿と善化寺大殿は同鋪作数の補間鋪作と柱頭鋪作

を用いたが、大斗下の臺股を継承した要因はおそらく意匠的な考えからであろう。

一方で、同鋪作数の補間鋪作と柱頭鋪作を用いるようになってからも、遼・金代建築は様々なディテールに差異をつけて補間鋪作と柱頭鋪作を区別した。それらの差異の中、遼・金建築の特徴とも言われる斜栱については、別稿でまた詳しく述べたい。それ以外にも、前述した奉国寺大殿の壁付一層目の雲形肘木、大斗下の臺股のほか、昂の有無と形式、そして木鼻の形式で補間鋪作と柱頭鋪作を区別する例も多く見られる。以下、昂の有無と形式について論じたい。

昂は最初に構造物材として登場したが、遼代以降に構造の役割が弱くなった挿昂や完全な造作材になった仮昂が多く用いられるようになった。その中、挿昂の登場は前述した令栱の意義との関係が深いと考えられる。例えば崇福寺弥陀殿(金1143)(図8)の側面では六鋪作の補間鋪作を用いている。補間鋪作と異なり、柱頭鋪作は二本の挿昂を用いて七鋪作になっているため、一番上の手先に令栱を乗せることができる。この場合、令栱の有無によって補間鋪作と柱頭鋪作を区別する意匠的な意義が大きく見られる。

図8 崇福寺弥陀殿側面の柱頭鋪作(左)と補間鋪作(右)

3-4. 類型Ⅳ

類型Ⅳは頭貫に乗せられ、柱頭鋪作と同じ外観をもつ補間鋪作で、いわゆる詰組となるものである。このような形式は宋代の『营造法式』(宋式建築とも呼ぶ)、そして宋代建築にも多く見られ、後世まで伝わっている。『营造法式』は補間鋪作に関する規範を巻4の「大木作制度一」の「総鋪作次序」の条目に以下のように記述している。

凡於闌額上坐櫨斗安鋪作者謂之補間鋪作。當心間須用補間鋪作兩朵、次間及梢間各用一朵。其鋪作分布令遠近皆勻。

凡て闌額(頭貫)の上に櫨斗(大斗)をすえて鋪作をおくものはこれを補間鋪作という。中央間の柱間には補間鋪作を二朵(組)、次の間と端の間にはそれぞれ一朵(組)を用い、その補間鋪作の分布を遠近総て等しいようにしている。^{注13)}

補間鋪作の形式に関して文書中では詳しく説明されていないが、図様に補間鋪作と柱頭鋪作が同じ外観で描かれている。それをもとに、『营造法式』の補間鋪作における特徴は以下のように捉えられる。

- ①補間鋪作と柱頭鋪作の外観を一致させる。
- ②補間鋪作の大斗を台輪に乗せる。
- ③補間鋪作を均等に配置する。

宋代の遺構を参照すると、保国寺大殿(北宋1013年)と少林寺初祖庵(北宋1125年)は、補間鋪作と柱頭鋪作の外観が完全に一致しており、宋代建築の外観を均等化させる意匠が見られる。そのほか、河北省易縣に位置する遼代後期の開元寺毘盧殿・観音殿・薬師殿も同じ外観をもつ補間鋪作と柱頭鋪作を用いている。

表1 唐代から金代までの出跳する補間鋪作を用いる遺構

建 物	年 代	所在地	規模 桁行・梁間	台輪の 有無	柱頭鋪作		補間鋪作		補間鋪作 大斗下装置	類型
					手先数	鋪作数	手先数	鋪作数		
仏光寺東大殿	唐857	山西省五台縣	7間・8架椽	×	4	7	2	4	(大斗無し)	I
大雲院弥陀殿	五代940	山西省平順縣	3間・4架椽	○	2	5	2	5	無し	IV
鎮国寺万仏殿	五代963	山西省平遥市	3間・6架椽	×	4	7	2	外5内4	束	I
華林寺大殿 正面	五代964	福建省福州市	3間・4架椽	×	4	7	4	7	無し	IV
独楽寺観音閣 2階平座	遼984	天津市薊縣	5間・8架椽	○	3	5	3	5	無し	IV
“ 2階平座端の間	“	“	“	“	3	5	2	4	束	I
“ 2階屋根	“	“	“	×	4	7	2	5	束	I
独楽寺山門	遼984	天津市薊縣	3間・4架椽	×	2	5	2	4	束	II
崇明寺中殿	北宋991	山西省高平市	3間・6架椽	×	4	7	2	4	(大斗無し)	II
梅庵大殿	北宋996	広東省肇慶市	5間・10架椽	○	4	7	4	7	無し	IV
保国寺大殿	北宋1013	浙江省寧波市	3間・8架椽	×	4	7	4	7	無し	IV
元妙觀三清殿	北宋1015	福建省莆田市	3間・8架椽	×	4	7	4	7	雲形臺股	IV
奉国寺大殿	遼1020	遼寧省義縣	9間・10架椽	○	4	7	4	7	臺股	III
広濟寺三大士殿	遼1024	天津市宝坻区	5間・8架椽	○	2	5	2	4	束	II
開善寺大殿	遼1030	河北省新城市	5間・6架椽	○	2	5	2	4	束	II
下華嚴寺薄伽教藏殿	遼1038	山西省大同市	5間・8架椽	○	2	5	2	4	束	II
隆興寺摩尼殿	北宋1052	河北省正定縣	7間・8架椽	○	2	5	2	5	無し	III
仏宮寺釈迦塔 裳階脇間	遼1056	山西省応縣	八角形塔	○	2	5	2	4	束+臺股	II
“ 裳階中央間	“	“	“	○	2	5	2	5	臺股	III
“ 1階屋根	“	“	“	○	4	7	4	6	臺股	II
“ 2階平座	“	“	“	○	3	5	3	5	臺股	III
“ 2階屋根	“	“	“	○	4	7	2	5	臺股	I
“ 3階平座	“	“	“	○	3	5	3	5	無し	IV
“ 3階平座正方位	“	“	“	“	2	5	3	5	無し	III
“ 3階屋根	“	“	“	○	3	6	3	6	臺股	III
“ 4階平座	“	“	“	○	3	5	3	5	無し	III
“ 4階屋根	“	“	“	○	2	5	2	5	臺股	III
“ 5階平座	“	“	“	○	2	4	2	4	無し	IV
“ 5階屋根	“	“	“	○	1	4	2	4	臺股	III
保聖寺大殿	北宋1073	江蘇省甯直鎮	3間・8架椽	×	2	5	2	5	無し	IV
晋祠聖母殿 身舎正面	北宋1102	山西省太原市	7間・8架椽	○	3	6	3	6	無し	III
“ 裳階正面	“	“	“	○	2	5	2	5	無し	III
開元寺毘盧殿	遼1109	河北省易縣	3間・6架椽	○	2	5	2	5	無し	IV
開元寺観音殿	遼1109頃	河北省易縣	3間・6架椽	○	替木+1	替木+3	替木+1	替木+3	無し	IV
開元寺薬師殿	遼1109頃	河北省易縣	3間・4架椽	○	2	4	2	4	無し	IV
閣院寺文殊殿	遼1114頃	河北省涿源縣	3間・6架椽	○	2	5	2	4	束+臺股	II
善化寺大殿	遼12世紀初	山西省大同市	7間・10架椽	○	2	5	2	5	臺股	III
浄土寺大殿	金1124	山西省応縣	3間・6架椽	○	1	4	1	4	無し	IV
少林寺初祖庵	北宋1125	河南省登封市	3間・6架椽	×	2	5	2	5	無し	IV
龍岩寺中殿 中央間	金1129	山西省陵川縣	3間・4架椽	○	2	5	2	5	無し	IV
善化寺普賢閣 1階屋根	金再建	山西省大同市	3間・4架椽	○	2	4	2	4	無し	IV
“ 2階平座	“	“	“	○	2	4	2	4	無し	IV
“ 2階屋根	“	“	“	○	2	5	2	5	無し	IV
“ 2階屋根正面・背面中央間	“	“	“	“	2	5	2	5	無し	III
仏光寺文殊殿	金1137	山西省五台縣	7間・8架椽	○	2	5	2	5	無し	III
上華嚴寺大殿	金1140再建	山西省大同市	9間・10架椽	○	2	5	2	5	臺股	III
善化寺三聖殿	金1143再建	山西省大同市	5間・8架椽	○	3	6	3	6	無し	III
善化寺山門	金1143再建	山西省大同市	5間・4架椽	○	2	5	2	5	無し	IV
崇福寺弥陀殿	金1143頃	山西省朔州市	7間・8架椽	○	4	7	4	6	無し	III
崇福寺観音殿 正面・背面	金1143頃	山西省朔州市	5間・6架椽	○	2	5	2	5	無し	IV
“ 側面	“	“	“	“	2	5	2	5	無し	III
二仙宮中殿 正面中央間	金1161	山西省高平市	3間・4架椽	○	2	5	2	5	無し	III
晋祠献殿	金1168	山西省太原市	3間・4架椽	○	2	5	2	5	無し	III
龍門寺天王殿	金年代不詳	山西省平順縣	3間・4架椽	○	2	5	2	5	無し	III

*前の例と共有する情報を「」で省略する。

4. 結び

以上の考察の結果は以下の通りである。

①補間鋪作と柱頭鋪作を区別する意匠は早く五代の遺構にも見られる。

②補間鋪作において、肘木が出跳し始めた段階から詰組に到達するまでの類型のほとんどが遼代建築に見られる。また、発展途中段階と考えられる遼代建築の補間鋪作では、柱頭鋪作より鋪作数を減らし、令栱を省略する手法、または柱頭鋪作と同鋪作数に至っても細部に差異をつけて柱頭鋪作と区別する工夫が多く見られる。

一方、本稿は触れていないが、遼代建築の意匠を継承し、補間鋪作と柱頭鋪作の差異を多様な手法でさらに強調する金代建築以外に、詰組の影響を受け、補間鋪作と柱頭鋪作を一致させる金代建築も多く見られる。そのため、五代の北方地方に登場し始め、遼代に盛行した補間鋪作と柱頭鋪作を区別する意匠において後世建築に与えた影響を次の課題にしたい。

注

- 注 1)本稿が使う中国建築の用語について、以下、竹島卓一：『营造法式の研究 三』、中央公論美術出版、1972.12 の用語解説を参照して説明する。
鋪作——斗・栱・昂の類を組合せてつくる複雑な構造体。
柱頭鋪作——柱の直上に用いる斗栱。
補間鋪作——柱と柱との間の位置に詰める斗栱。
出跳——栱或は昂で大斗から外へ持出すこと。日本で手先という語に等しい。
昂（飛昂）——日本では尾垂木と呼ぶ。
令栱——斗栱の最前出の秤肘木。
華栱——壁から跳出する肘木。
羅漢枋——斗栱で丸桁が持出されている建築において、柱の真上を通る柱頭枋、即ち檐桁と、斗栱で持出された先の椽檐枋、即ち丸桁との間に施される桁で、直接垂木に接するもの。
椽檐枋——建築の一番外周に繞られる母屋桁で、直接垂木を承ける。
平棊枋——梁・母屋桁などの下に当たるところに配し、天井を大きく区劃する親骨。
徹上露明造——天井がなく屋根裏が見える構造。
- 注 2)飯田須賀斯：『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』特に細部に就いて、相模書房、1953.10。
- 注 3)田中淡：『中国建築史の研究』、弘文堂、pp.459-471、1989.7。
- 注 4)関口欣也：『第七章 高麗末李朝前期における詰組系様式の系統』、江南禅院の源流、高麗の発展、中央公論美術出版、2012.2。
- 注 5)蕭默：『敦煌建築研究』、機械工業出版社、pp.226-241、2003.3。
- 注 6)郭黛姮：『中国古代建築史第三卷』、中国建築工業出版社、p.405、2003.9；潘谷西、何建中：『营造法式解詠』、東南大学出版社、p.84、2005.11。
- 注 7) 関口欣也：『江南禅院の源流、高麗の発展』、中央公論美術出版、pp.348-349、2012.2。
- 注 8) 野村俊一：表「中国における全国重点文物保护单位古建筑にみる組物と台輪」、『構成要素の調査』、鏝阿寺本堂調査報告書、足利市教育委員会、pp.131-132、2011.3。
- 注 9)梁思成：『梁思成全集 第七卷』、中国建築工業出版社、p.104、2001.4。
- 注 10)〇架椽：梁間の表示方法。前後側柱の間桁の間の数。
- 注 11)傅熹年：『中国古代建築史 第二卷』、中国建築工業出版社、pp.279-294、2001.12。
- 注 12)鎮国寺万仏殿に関する解説は以下のものがある。『中国建築の研究』、p.463；『世界美術大全集東洋編 5』、p.406；柴沢俊古『建築文集』、p.160；『中国古代建築史第二卷』、p.501。田中淡氏は『中国建築の研究』の第四章で、仏光寺東大殿の補間鋪作と比べて鎮国寺万仏殿の補間鋪作は、第一跳に乗せられている翼形栱がないことのほか、まったく同形式と解説している。柴沢俊氏は『山西省幾処重要古建築実例』にて、鎮国寺万仏殿の補間鋪作は下層通肘木から出跳する五鋪作で、仏光寺東大殿の補間鋪作と同形式と解説している。『中国古代建築史』第二巻の解説にも、鎮国寺万仏殿補間鋪作は内側が一手先多い以外、仏光寺東大殿の補間鋪作と同じ形式をもつと書かれている。

注 13)竹島卓一：『营造法式の研究 三』、中央公論美術出版、p.312、1972.10。

図版出典

- 図 1 ①『中国古代建築史第二巻』、中国建築工業出版社、p.290、2001.12；
②『中国古代建築史第二巻』、中国建築工業出版社、p.293、2001.12；
③-1 敦煌建築研究、機械工業出版社、p.229、2003.3；
③-2 筆者現地調査の写真、2008.3；
④敦煌建築研究、機械工業出版社、p.231、2003.3；
の図面などを参照して作成。
- 図 2 筆者作成。五台山仏光寺、文物出版社、2010.11 の図面を参考。
- 図 3 筆者作成。傅熹年：『中国古代建築史 第二巻』、中国建築工業出版社、2001.12 の図面と現地調査の写真を参考。
- 図 4 筆者作成。郭黛姮：『中国古代建築史 第三巻』、中国建築工業出版社、2003.9 の図面を参考。
- 図 5 陳明達：『応県木塔』、文物出版社、2001.9 の図面に加筆。
- 図 6 筆者作成。蕭默：『敦煌建築研究』、機械工業出版社、2003.3 の図面を訂正。元の図面では大斗を用いる補間鋪作が描かれている。
- 図 7 筆者作成。五台山仏光寺、文物出版社、2010.11；薊県独楽寺、天津大学出版社、2007.8；『中国古代建築史第三巻』、中国建築工業出版社、2003.9；大同古建築調査報告、中国营造学社集刊第四巻第三、四期、1934.6；義県奉国寺、天津大学出版社、2008.6 の図面を参考。
- 図 8 柴沢俊：『朔州崇福寺』、文物出版社、1996.5 の図面に加筆。

(2012年1月10日原稿受理、2012年9月27日採用決定)